



海に生きる人たち

〜再び岩手県大槌町へ⑧〜

大槌町は大槌湾に面し、漁業が中心の町である。二〇〇七年の統計によると、岩手県は養殖ワカメの生産量が日本一で全国の四九%を占め、その中心の一つが大槌町である。湾に面した町の中心

は今回の津波で壊滅的な被害を受け、二年経った今も住宅は一軒も再建されていない。東北本線の花巻と釜石を結ぶ釜石線の終点、釜石。そこから古に向かつて三陸沿岸を走るJR東日本の山

いに三階建ての大槌漁協の建物がある。流失は免れたものの三階まで津波に襲われ、今も使用されていない。漁協の建物と海との間のスペースで養殖ワ

カメの加工作業が再開されている。ワカメはここに水揚げされ、選別、湯通しして冷水で洗い「湯通し塩蔵わかめ」が生産される。

四日間の現地でのボランティア活動で、学生や幼稚園の先生

ら若者を中心に一日だけ加工作業に参加した。作業用の上下カット、袖まであるゴム手袋、長靴などはすべて大槌ベースに用意して



海の男の風格が漂う

ある。

朝九時、現場に着くと作業はもう始まっていた。指示された作業を手伝う。最初は湯通しされたワカメの中から太い茎の部分だけを包丁で切り取る作業。

続いて湯通しされたワカメを海水で洗う仕事。よくかき混ぜて冷やす…ここがおいしいワカメづくりのポイントの一つらしい。

私は四十三年間、ホワイト・カラーのサラリーマン。大自然の海を相手とする仕事などの体験は一度もないだけにすべてが新鮮で、胸がワクワクする。親しくなった男性はいかにも海の男らしく、だみ声で能弁ではないが、素朴な人柄が伝わって来る。

自然を相手の仕事には何か躍動感がある。

しかし、海を相手に生きる人が海の津波ですべてを奪われた。その現実を受け入れ、黙々と海とともに生きる姿に胸が熱くなる。

と、足が冷たいことに気づく。ワカメを洗う海水がズボンにかかり、長靴の中に入ったのだ。周りの人を見ると、みんな私とは逆に長靴はズボンの下に隠れている。今さら長靴からズボンを出して

も遅い。一生懸命、ワカメを洗い続けた。現地での四日間の活動を終えた最後の夜、お土産にと一人一袋「湯通し塩蔵わかめ」が届いた。自宅に帰り、みそ汁や酢のものに入れて食べたが、実にうまい。

先日、防府カトリック教会のバザーで、一緒にボランティアに行った人が大槌からワカメを取り寄せて販売するというので出かけて買い求め、友人に配った。「うまい」と評判が良かった。

ワカメだけでなく、漁協も復活してすべての漁が再開され、元気な大槌に戻るよう祈りたい。



津波で使用できなくなったままの

大槌漁協の建物

田線がある。大槌駅は山田線の釜石から三番目の駅だが、今は跡形もなく、復旧の見通しはない。駅があった所から車で五分の沿岸沿



再開されたワカメ漁



幼稚園の先生と大学生